

# 遠江・山と里の民俗

食報 第005号



8月14日 愛宕さまの庭で念仏踊りを行う。上組池島



水窪町の念仏踊り平成九年旧教育委員会発行によると水窪町各集落で念仏踊りが盛んに行われていた様子がわかる。昔の形式を残している西浦が県の指定となっている。

県指定無形民俗民俗文化財

浜松市最北端の

## 「西浦の念仏踊り」

西浦の念仏踊りも三組(下・中・上組)と分かれていているが八月八日は合同で水泉寺に集まり寺施餓鬼と夜お寺の庭で三組の施餓鬼踊りをしていった。(現在は行っていない)

十四日の迎え盆の夜は各組それぞれ分かれて念仏踊りをし、新盆のソウリヨを回向する。かつては新盆の家庭を訪れて屋敷で踊ったが寺や家の庭に精霊棚を設け、そこに位牌を祀って念仏踊りをするようになった。

十五日は上組池島の愛宕さまの祭りでもある。念仏踊りと世の中踊りをする。

十六日夜は送り盆で組ごとに念仏踊りを行う。

最後に新盆の家から持ち寄った位牌堂をはじめ提灯籠を一

行とともに河原に行つて焼却する。以前、川に流していた名残という。

### ■新盆踊り

十四の夕方から上組は愛宕さまで行う。三部構成である。

### ●初踊り

五方念仏  
六時念仏  
野辺の送り  
庭裏め踊り  
籠裏め踊り  
後生の踊り

### ●中踊り

酒裏め念仏  
長者和賛念仏  
地の酒和賛念仏  
原の河原念仏  
盛りの踊り  
聖の踊り  
籠裏め踊り  
四国踊り

### ●後踊り

おいとま踊り  
返しの踊り

### 無し

念仏和賛は念仏証のみで他の楽器は居れず音唱人が証をたたきつつ、上の句を出し、それに続けて双盤の周りの人が唱和する。念仏和賛は申うものが多いが踊りの中には奏め称えるものも沢山ある。



中組 新盆燈籠を送る行列

### ■楽器の形態

楽器は双盤・太鼓・念仏証・篠笛で構成されている。採物は灯笼・踊り棒・弓張提灯があり、灯笼は六角灯笼である。踊り棒を持つ若集が花笠をかぶり人の輪を広げたりする。

水窪町の盆行事は生活の一部として伝えられてきたものだが高齢化と過疎により各集落で念仏踊りは少なくなってきた。水窪全体の念仏踊りは県選択文化財になっている。お盆の日本の風景を山村部だからこそ残したいものだ。

和讃(わさだ)は、仏・菩薩、先人の徳、などに對して和語を用いてほめたかえる讃歌で三五調の列式の句を連ねて作られたものが多く、これに創作三拍流行していた慶律を付して朗誦するといい。



上組 送り盆(河原で)

## 懐山へ届いたお宝

柴田宏祐



懐山のおくない

「懐山おくない」で唱えられる数々の祭文は古今集の和歌の本歌取りをしたり、歌枕の地名を読み込んだりした美しい文章で構成されている。その作者として中世の猿楽者や能楽者を始めとする教養の高い都人を浮かび上がらせてくれる。

「鶴のかがり」の「おきなさしぬき」の翁は紀伊半島から船出して太刀や弓矢、十二単衣を始めとする数々のお宝を集めて、「懐山のおくない」の場に持ち込むというまことにめでたい祭文である。居並ぶ村人は得

も言われぬ数々のお宝を耳にして幸せな境地になり、これから迎える厳しい農作業に精を出すことになる。美しい言葉の表現は単なる遊びではなく、なりわいを支え、元気を与える源となっている。

数百年間繰り返されてきた言葉の世界も時には現実なることもある。こうした事例があったからこそ、祭文が作られ、それに命を吹き込んでいったのかも知れない。

### 今年出現のお宝

今年のおくないには紀伊半島から天竜川を遡上してきたお宝が本尊阿弥陀如来の前に供えられた。百五十年余の流転の旅を微塵も感じさせない美しい一對の唐金の燈籠がそれである。

誰も気づかなかつたが、燈籠の台座を目を凝らして見ると次のような刻印がされていた。

弘化二巳口吉辰奉燈

本尊前寄進 中村左為之照  
岸本庄兵衛  
玉置幸右衛門

和州十津川郷武蔵村  
光明寺什物 惠殊代



唐金の燈籠

大和の国(奈良県)十津川郷武蔵村光明寺の什物であり、住職惠殊(十四世)の代、弘化二年(一八〇〇)に中村・岸本・玉置氏から寄進された。

この燈籠がこの寺から去らなければならなかったのは次のような事情があった。

### 廃物毀釈の風

十津川郷武蔵村光明寺のいきさつは北海道から護国(まごくに)懐山おくないに訪れる榊嶺(さかざね)レイさんがくわしく語ってくれた。「誰も知らない熊野」と題して紀行文のお書きになっていたのでからだつた。

光明寺は十津川郷武蔵村にあった曹洞宗の寺院である。ところが、明治初年十津川村には全国でも有名なほど廃仏毀釈の風が押し寄

せたのであった。村内の寺院はことごとく廃寺になった。仏像や仏具は川に流されたり、焼却されたりしたという。そうした経緯の中で光明寺の燈籠が無傷のまま伝わったのは奇跡というしかない。

今回、懐山おくないのご本尊のお厨子を開き、長年の埃を払い、外れた光背を修理をさせていただいた。



懐山の本尊

久しぶりにご開帳できたご縁に由来するかのように私が燈籠を奉納する仲介をする事になった不思議なご縁を感じている。

### 若き研究者との出会い

お宝との出会いはもう一

つあった。おくないの大詰めである「汗掛け飯進上」の場で私の前に座った一人の青年宮嶋隆輔君との出会いである。

「能楽成立以前の古い祭文が残っているのが、遠江だ。その中でも懐山は圧巻である」と静かな語り口の中にも情熱を秘めたまなざしに引かれ、研究を共にし、保存と継承に傾注し始めた。今、秋の発行を目指して彼と詞章の翻刻に取り組み始めた。

懐山おくないの祭文詞章本はいくつか伝承されてきたが今は大石伝次家伝来の安政二年「御祭禮用書」の翻刻をしている。

この秋に浜松市で開催される中世文学会に供されるように進めている。

「鶴亀とよとよ踏みならし来たる村なれば今ぞ寄せじの富ぞ入ります」

「目度度さよ」 (松影)

この祭文のように懐山から幾多の富やお宝が発信される日も近いであろう。

## 中世芸能の宝庫・三遠南信 「翁」を中心に 成城寺小屋講座

宮嶋隆輔



雲山翁面

それが懐山、寺野、神沢、西浦、黒沢、田峰などの正月の祭りでは演じられる翁だった。

翁面を被った演者は、様々な祝言を述べ、自らの生い立ちを語った後、「宝数え」でクライマックスを彩る。翁は世界中の宝（天竺・唐土・日本の宝物）を数え上げて船に乗せると、天竜川を遡上して祭りの場へと運び込み、神仏に捧げて一年の豊穰や安全をこころほぐのだ。

「翁」（老翁をかたどる仮面）の芸能と出会ったのは六年前、三河の神楽（花祭り）でのことだった。ふらふらとした足取りで舞処に出ては、マジカルでユーモラスな物語を語り、飄然と去っていく。その不思議な語り口、捉えどころのない後ろ姿に惹かれて研究を始めた。

ところが語りの詞章を解読するなかで、もっと大きな存在にぶつかった。花祭りの翁の源流には、さらに古くて、豊かな語りをもつ翁がいたのである。

に繋ぎ合わせ、「翁」（神とも人ともつかぬ不思議な存在）というキャラクターに集約したものである。意外にも雅びやかで、ハイブリッドな芸能なのだ。その背景には都市部から地方へと進出してきた「猿楽」の芸能者たちが関わってくるが、演じる主体は村人たちであった。異国の宝を運んできた翁を、「あれはなじみの翁どの、そよやいずこの翁どの」（あれはどこから来なさった翁殿だろう？）と皆でうきうきと囃したてることが、はじめて宝物の納受は確かなものとなるのだから。「翁」は観客に見せるための芸ではなく、芸能者と村人たちが共演して福を呼び込むものだったのだ。



懐山の穂

以前の、豊かな芸能的想像力が三遠南信の祭りには伝承されてきたのだ。

翁だけでなく、農作業を模擬的に演じる「田遊び」の芸能もまた、思いがけないみやびの華を咲かせてくれる。

春来ればまず花米を打ち蒔きて、昨日まで早苗取りしがいつの間、稲穂がそよと秋風とするらりと降りうらりやこのちんがわさるのこへ

いなぶらは囃すほど高くなるものよ 囃せばく  
囃すほど高くなるものよ  
（懐山おくないの）

「昨日には種初を蒔いて、苗を育てていたと思えば、気が付けばもう秋で、稲穂がそよいでいるなあ……」田遊びの常套句「春来れば」の歌と、古今集の「昨日こ

そ早苗取りしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く」の和歌を繋ぎ、「今年も稲叢（収穫した稲）が高く積まれますように」という祈りに結実している。こうした美しい詞章が、稲叢が増えてゆく様をあらわす古風な所作をともなつて、今も演じられていることは本当に貴重である。



川名のひよんどり稲叢の舞

ここに紹介した演目は三遠南信のいくつかの土地で演じられるが、そのどれもが絶妙に趣向を違えており、それぞれのオリジナリティを發揮している。こうした古くて新しい祭りの視界から、日本の芸能を見直す必要があるだろう。

編集 浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会・発行 浜松市 電話053145712466

# 浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会「総会」



総会に集まった各団体のメンバー役所の人たちで廊下まであふれていました！  
総会後ひよどり会場をご案内→

**会場に入りきれないほど・・**  
総会には保護団体の会員をはじめ東三河の田峯田楽・黒沢田楽の人たちも参加してくれました。東京から前頭で述べられた宮嶋さん、和光大学教授山本ひろ子先生も出席してくださり、好評をいただきました。  
浜松市では保護団体が立ち上がり広報誌を通しお互いの活動がよくわかるようになって来ました。文化財課から日本遺産の提案もあり、今後この会の役割も大きくなるでしょう。



## ■総会報告

期日 平成27年6月24日  
会場 旧川名小学校  
川名のひよどり保存会の事務所  
内容 事業報告 会計報告  
事業・予算計画を審議

## ■今後の予定

○10月「遠江・山と里の民俗」  
第5号発行  
○10月31日(土)12時  
「中世文学会大会」  
会場 静岡文化芸術大学講堂  
西瀬田楽・横山おくない  
・神沢のおくないが出演

○11月27日(日)10時  
会場 旧川名小学校  
講演「民俗芸能の始まりと  
未来への継承」  
講師 元静岡産業大教授  
中村羊一郎先生  
講演後ひよどりの里巡り

主催 NPO法人  
かわなの里ほぐせんぼ  
○1月16日(土)13時30分  
会場 クリエート浜松  
田峯田楽公演  
主催 未来ネット浜松

○2月「遠江・山と里の民俗」  
第6号発行

## ■役員 (27年・28年)

- 会長 前嶋 功 (川名)
- 副会長 深美位茂 (滝沢)
- 理事 大石傳次 (懐山)
- 理事 守屋治次 (西瀬)
- 理事 高井 勇 (横尾)
- 監事 石野重利 (神澤)
- 監事 嶋田 治 (川合)
- 事務局長 柴田宏祐
- 事務局次長 上嶋裕志

## 浜松市長 三遠南信地域の民俗芸能日本遺産認定を目指す

浜松市の鈴木康友市長は、6月12日の市議会代表質問で、遠州、東三河、南信州からなる三遠南信地域で中世から残る民俗芸能について、本年度から文化庁が創設した「日本遺産」の認定を目指す意向を明らかにした。  
「日本遺産」とは、地域に伝わる民俗芸能等文化遺産を面的に活用し国内外に発信することで、地域のブランド化・アイデアシティの再確認を促進する目的で、本年度から文化庁が創設した制度。今後、各地域・団体はどのような体制を作ればよいか課題は多いが、3地域で連携して来年の認定に向けて取り組んでいく。

### 三遠南信の民俗芸能

国指定重要無形文化財

- 道教の指定
- 早稲での指定



## ■編集後記

県の無形民俗文化財指定の西瀬の盆踊りを取材しました。西瀬でも北便にあたる上瀬(池田)に行きました。  
和舞と盆踊り入り混じり行われます。この和舞は、ほめる歌「ほめ、遠はめ、遠ほめ」と多い。古くから、ほめることで地域がまとまっているのではと感じました。  
西瀬を後に再校中に園取リ合戦のヒョー舞し時を通り長野県天龍村坂部の盆踊り、それが終わって一晩中行っている新野の盆踊りに寄って帰ってきました。  
一晩で3ヶ所の修行事を取材し無事帰りました。途中大きな雨に3度出会いました。  
H.K.